婦人宣教師シャーロット・デフォレストの音楽活動：オペラ歌手柴田（三浦）環との共演

津　上　智　実

Woman Missionary, Charlotte De Forest's Musical Activities: as Co-star of Opera Singer SHIBATA (MIURA) Tamaki

TSUGAMI Motomi

Abstract

On 28th November 1910, woman missionary of the American Board, Charlotte De Forest (1879–1973), played piano, accompanying the famous opera singer SHIBATA (MIURA) Tamaki (1884–1946), on the stage of Aioi-za theatre, Kobe. This article clears the mystery, why an American woman missionary, teacher in Kobe, co-staged with the first Japanese prima donna, resident in Tokyo, on the stage of a vulgar theatre in Shinkaichi, Minatogawa, next to the red-light district in Kobe.

Reading of the related materials made it clear that it was a charity concert for the benefit of the Okayama Orphanage, the first Japanese orphanage by devoted ISHII Juji, which had been supported continuously by Kobe College, where De Forest was teaching, and also by John De Forest, another missionary and father of Charlotte.

It was announced in newspapers that SHIBATA Tamaki and De Forest were to play 'Air des bijoux' by Charles Gounod from his opera "Faust", and 'Ombre légère' by Giacomo Meyerbeer from "Dinorah". Actually they played another aria 'Una voce poco fa' by Rossini from "Barbiere di Siviglia", because of the throat trouble, tonsillitis, of the singer.

In the autumn of 1910, the benefit concerts for the Okayama Orphanage were held not only in Kobe, but also in Kyoto (18th, 19th and 20th October) and Osaka (28th and 29th October). The accompanist for SHIBATA Tamaki was IZUMI Chiyoko in Kyoto, KURIHARA Kinko in Osaka, both talented and often mentioned piano-players in their towns. This suggests De Forest's high ability and evaluation as a piano-player.

The opportunities De Forest played on public places, five times between 1907 and 1910, reveals her policy to utilize music making to serve the society. They were all charity concerts for congregational or educational institutions. She played on stages not for the music itself but for the benefit of people.

The program making of the charity concerts of 1910 was a typical 'hodgepodge program', combination of Japanese traditional performing arts, Nagauta, Koto, Noh, Kyogen etc, and of Western music of singing, piano playing, and military band. Probably this was to serve the purpose of having as many audiences as possible. At the same time, it seems to reflect the taste and liking of the then Japanese people in main towns in Kansai district and also the positioning of Western music in Japanese society.

The situation and context of this surprising co-starring of De Forest and SHIBATA Tamaki tells us much about the music world in the last period of Meiji Era.

キーワード： シャーロット・デフォレスト、小倉末子、柴田（三浦）環、岡山孤児院、婦人宣教師
Key words: Charlotte De Forest, OGURA Suyeko, SHIBATA (MIURA) Tamaki, Okayama Orphanage, woman missionary

---

本学音楽学部音楽学科教授
連絡先：津上智実　〒662-8505　西宮市岡田山4-1　神戸女学院大学音楽学部音楽学科
tsugami@mail.kobe-c.ac.jp

1）不思議な舞台

婦人宣教師シャーロット・デフォレスト Charlotte Burgis De Forest（1879–1973）は米国中部伝道団婦人宣教師として1904年末に日本に派遣され、1905年から1950年まで神戸女学院の教育に携わった。その間、1915年から1940年まで神戸女学院第５代院長を務め、神戸山本通の旧キャンパスから現在の西宮市岡田山キャンパスへの移転を実現するなど、大きな功績を残した名院長として知られる。専門は詩歌と聖書であった。そのためもあってか、これまでデフォレストの音楽活動について語られることは絶えてなかった[1]。一つには演奏というものが終ってしまえば跡形もなく消え去ってしまうためもあるだろう。100年も昔に、誰が、どこで、何を演奏したかを跡づけるのは容易なことではない。

しかるに私は、神戸女学院音楽部の初期卒業生で大正期に花形ピアニストとして活躍した小倉末子（1891–1944）の音楽活動について調査を続ける中で、思いがけない記事に出会った。神戸女学院関係者にとっては「我らがデフォレスト先生」とも言うべき人が、オペラ歌手で「世界の蝶々さん」として知られるようになる三浦環こと柴田環（1884–1946）[2] と共に舞台に立って、ピアノでその歌の伴奏をしたというのである。時は明治43（1910）年11月、場所は「神戸湊川相生座」、遊郭を控えた歓楽街として栄えた湊川新開地[3]の芝居小屋で、普段は歌舞伎や活動写真が掛かっていた場である（図１「神戸相生座」参照）。

神戸在住のアメリカ人婦人宣教師が、東京在住の日本人オペラ歌手と、「西の浅草」と言われた猥雑な大歓楽街の芝居小屋で共演するなどという奇妙なことがなぜ起ったのか、常識的には理解できない。まるで狐につままれたような思いがする。この不思議な舞台の謎を解き明かすこと、そしてこれまで語られることのなかった婦人宣教師シャーロット・デフォレストの音楽活動の一端について報告することが本論の目的である。

2）柴田環との共演（明治43年11月28、29日）

デフォレストと柴田環との共演を示すのは、1910年11月26日の神戸新聞（第4544号）に掲載された次の記事である。

「慈善音楽」二十八九の両日相生座に開催の岡山孤児院慈善音楽会番組は左の通り変更[4]（初日）△歌劇白衣婦人（陸軍軍楽隊）△開会の辞（発起者）△長唄越後獅子（陸軍軍楽隊）△琴曲楓の花（尾崎秀子）△独唱（ミセス、ウィルバー、ミス、デホレスト）△合奏松竹梅（菊月米秋、菊明弘、菊久茂登、菊本春）△独唱ビヂユー、ソング、グノー作曲（柴田環、ミス、デホレスト）△歌劇フォスト（陸軍軍楽隊）△活動写真、岡山孤児院（石井十次）△独唱（柴田環、ミス、デホレスト）△能狂言軟膏売（角田翁一派）△歌劇タンハイザー（陸軍軍楽隊）

（二十九日）△歌劇魔笛（陸軍軍楽隊）△開会の辞（発起者）△長唄勧進帳（陸軍軍楽隊）

図1「神戸相生座」
ⓒ東北芸術工科大学東北文化研究センター所蔵（文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究」による）

△合奏楓の花（高山節）△独唱オンブラー、レジェーラ、マイヤベヤ作曲（柴田環、ミス、デホレスト）△合奏春之曲（中野勇一、眞内充、清水初、尾崎秀、古×都×）△歌劇北方の清音（陸軍軍楽隊）△活動写真、岡山孤児院（石井十次）△能狂言柿山伏（角田翁一派）△筑前琵琶△滑稽なる出来事（陸軍軍楽隊）［下線筆者］

〈明治43（1910）年11月26日『神戸新聞』第4544号〉

これを見ると分かるように、デフォレストは初日（11月28日）には「ミセス、ウィルバー」と柴田環の歌の伴奏で3ステージ、二日目（11月29日）には柴田環の伴奏で1ステージの計4ステージ出演することになっていた。「ミセス、ウィルバー」との演奏曲目については記載がないが、柴田環との演奏については「独唱ビヂユー、ソング、グノー作曲」（11月28日）、「独唱オンブラー、レジェーラ、マイヤベヤ作曲」（11月29日）の2曲が挙げられている（初日の2ステージ目については曲名不明）。前者はグノー Charles François Gounod（1818–1893）のオペラ《ファウスト Faust》（1859年初演）のヒロイン、マルガレーテが歌う〈宝石の歌 Air des bijoux〉、後者はフランス語のグランド・オペラを大成したジャコモ・マイアベーア Giacomo Meyerbeer（1791–1864）のオペラ《ディノラ Dinorah》（1859）のアリア〈軽い影よ Ombre légère〉（影の歌）を指す。いずれもコロラトゥーラの技巧的なアリアで、演奏時間11分半と6分弱の長大な曲である。演奏会の二日前に新聞発表されたこれらの曲を、常に備えを怠らなかったデフォレストは十分に練習していたに違いない。

ところが、ソリストの柴田環が喉を痛めてしまう。1910年11月29日付『神戸又新日報』（第8750号）の記事が伝えるところによれば、下記のように、扁桃腺炎に罹って神戸の耳鼻咽喉科医の手術を受けたと言う。

> 昨今両日相生座に於ける岡山孤児院の慈善演奏会に出演する為来神せし柴田環女史は扁桃腺炎に罹り旅館吉野館にて細見耳鼻咽喉科病院長の手術を受け居れるが、何分発音に故障せる為め長時間の演奏は困難なるべく兎も角強いて出演すべしと、尚女史へ天王花やしき天清園より美麗なる大花籠を贈れり
>
> 〈明治43（1910）年11月29日『神戸又新日報』第8750号〉

そのため、結局１曲のみを歌うことになったらしい。しかもその１曲は上記２曲とは別の曲だった。翌30日付『神戸又新日報』（第8751号）の記事は、「女流音楽家の明星柴田環女史は岡山孤児院の事業に同情して一昨夜と昨夜相生座に於ける慈善演奏会に出演し予て来神前よりの扁桃腺炎に発声困難なる苦痛を忍びてドシン作曲デポコパア一曲を独唱したり」と伝えている。ここで「ドシン作曲デポコパア」とあるのは「ロッシーニ作曲〈ウナ・ヴォーチェ・ポコ・ファ Una voce poco fa（今の歌声は）〉」のことと思われる。この曲はロッシーニのオペラ《セヴィリアの理髪師》のヒロイン、ロジーナが歌うアリアで、東京音楽学校の外国人教師で柴田環の師であったハンカ・ペッツォールドが弟子達に好んで教えた一曲だった[5]。

続いて、この記事は演奏評に入り、「美音は言うまでもなき事ながら秀麗なる美容にその表情を見せ満場立錐の余地なき入場者の大喝采を博したり、曲は或る田舎の理髪店の少女が謳える最も目出たき唄にして婉然、女史本人がその少女に成り果せし如く可憐なる声音は小禽の如く又笛の如く、殊に外人側に深き感動を与えたり、尚伴奏者ミス、デホレスト嬢も亦共に好評を博せり」［下線著者］と伝える。ここから、変更後の曲〈ウナ・ヴォーチェ・ポコ・ファ〉もデフォレストが伴奏したことが分かる[6]。

この演奏会の初日当日には、次の二つの新聞記事が掲載された。まず、11月28日付『神戸又新日報』（第8749号）には「柴田環女史、相生座の慈善会に出演」と題して「……今回岡山孤児院の事業に同情し今明両日湊川相生座における同院慈善演芸会に出演し、その美貌と美声に一層その妙技を発揮すべく、伴奏者は独逸婦人某嬢なりと」とあり、伴奏者については「ドイツ婦人」と誤記されている。一方、同日の『大阪毎日新聞』（第9794号）には「柴田環女史の独唱、二十八、二十九両夜、神戸湊川相生座にて催す岡山孤児院慈善音楽会には柴田環女史出演、神戸のデホレスト嬢の伴奏にて独唱を試むる由」［下線筆者］と要点が簡潔に記されている。

さらに、同年12月２日付『神戸又新日報』（第8753号）に柴田環の神戸駅出発（11月30日）を報じる記事が掲載された。そこには「一昨日の夜六時過ぎ、神戸駅の一二等待合室に現われたのは相生座の岡山孤児院慈善音楽会の初日に病を押して出場し名代のメロヂーに満場の聴衆を酔わせた柴田環女史」とある。ここで「初日に病を押して出場し」とあるのは、上記11月30日付の「柴田環女史は……一昨夜と昨夜相生座に於ける慈善演奏会に出演し」と矛盾する。柴田環が出演したのは初日だけなのか両日なのか、これだけでは判断できない。

以上から、デフォレストが少なくとも1910年11月28日には神戸湊川相生座で、柴田環の歌うロッシーニの〈ウナ・ヴォーチェ・ポコ・ファ〉のピアノ伴奏をしたことが明らかになった。

3）岡山孤児院と慈善演奏会

この演奏会は、上述のように「岡山孤児院の慈善演奏会」として行なわれたものであった。岡山孤児院は、石井十次（1865-1914）が明治20年（1887）に創設した日本初の孤児院である。災害（濃尾大地震や東北大飢饉）や日露戦争で孤児となった子どもたちを人数制限なしで次々と受け入れ、多い時には1200人もの孤児を養っていた。明治26年（1893）から孤児による音楽隊（風琴音楽隊、のちにブラスバンド）を組織し、明治31年（1898）からは音楽幻燈隊、明治36年（1903）からは音楽活動写真隊を編成して全国を巡業し、寄付金を集めていたが、明治41年（1908）8月にこれを停止した[7]。

明治43（1910）年秋の慈善演奏会は、神戸だけで行なわれたものではなく、京都（10月18～20日の3日間）、大阪（10月28～29日の2日間）、神戸（11月28～29日の2日間）の関西3都市で行なわれた。その日程と出演者ならびに演し物は、表1「1910年秋の岡山孤児院慈善演奏会一覧」の通りである。

このように、いずれの演奏会も長唄や浄瑠璃、琴尺八、三曲合奏、筑前琵琶といった邦楽と、ピアノやヴァイオリン、独唱、軍楽隊による洋楽とが混在するいわゆる「ごたまぜのプログラム」[8]であったが、その中で最大の呼物は柴田環の出演であった。

柴田環（1884-1946）は東京音楽学校在学中から自転車美人として話題を呼び、明治36（1903）年に本邦初の歌劇上演グルックの《オルフォイス》でエウリディーチェ役（百合姫）を演じて一躍スターとなった。卒業後は母校の教員を務めていたが、明治42（1909）年3月に藤井善一との離婚で騒ぎとなり、そのあおりで同年9月に東京音楽学校を辞職した。翌年の明治43（1910）年6月、楽壇に返り咲いて話題になったばかりであった[9]。大阪公演の初日（10月28日）に関する次の報道記事からも、その人気振りを伺うことができる。

> 岡山孤児院慈善音楽会は二十八日中之島公会堂で開かれた、柴田環女史が東京よりこの会の為態々（わざわざ）来阪して得意の独唱をするというので一層聴衆を惹き付けた、中尾都山、菊原法師の三曲「残月」が了ると仏国人ポンテ氏夫妻のピアノとヴァイオリンの合奏がある、この次に柴田環女史は八つ橋に杜若の裾模様がある紫がかった葡萄色の小袖に糸錦の帯を締め細き金鎖を輝かして笑顔よく現れる、伴奏は栗原欣子女史ヴブビーヤフォンセビーラと外に一曲を独唱した、玉を転ばす如き美音に場内鳴を鎮める、女史はこの外に日本曲「小鳥の歌」と「白菊の歌」とを独唱してこれも大喝采であった、ハラハラホロホロなどと自然に美声を弄するうちに女史の眸は美しくなる、女史は「前のはあなた極高尚なむつかしい歌なんですよ、彼方でも楽劇（オペラ）で一流の人が唱んだそうです、まあ裸体画のようなものなんですね、後のは「理髪師（とこや）の恋」の一節です」と語った［下線筆者］
>
> 〈明治43（1910）年10月29日『大阪朝日新聞』第10299号「昨夜の音楽会」〉

表1）1910年秋の岡山孤児院慈善演奏会一覧

京都公演：
明治43（1910）年10月18，19，20日「岡山孤児院慈善演奏会」（三条柳馬場角青年会館）
ピアノ独奏（有志令嬢）、孤児院現況談（石井十次君）、独唱（グローバ夫人、伴奏カープ夫人）、琴尺八合奏秋の曲（江良千代子嬢、坂本音次郎君）、独唱ブアビーヤフォンセビーラ、ロシニー作曲其の他（柴田環女史、ピアノ伴奏泉千代子嬢）、狂言三人大名（茂山社中）、浄瑠璃盛塚寺（竹本長廣）、琴合奏鄙国の春（江良千代子嬢、坂本音次郎君）、狂言芥川（茂山社中）［以下省略、柴田環の演奏曲は三日間とも同じ］
〈明治43（1910）年10月14日『大阪朝日新聞』第10284号、京都附録〉

大阪公演：
明治43（1910）年10月28，29日午後6時「岡山孤児院慈善演奏会」（中之島公会堂）
（第一日）開会の辞（発起者総代）、奏楽序劇バグダートの酋長（軍楽隊）、三曲合奏残月（尺八中尾都山、三味線菊原琴次、琴某）、ピヤノヴァイオリン合奏（仏国人ポンテ氏夫妻）、ヴブビーヤフォンセビーラ、ロシニー作曲（独唱東京柴田環女、伴奏栗原欣子）、筑前琵琶台湾人（筑前長阪春雪）、奏楽歌劇龍姫（軍楽隊）、活動写真岡山孤児院の現況（説明者院長石井十次）、奏楽長唄勧進帳（軍楽隊）、能狂言柿山伏（角田翁一派）、ピヤノ独奏（仏国人ポンテ）
（第二日）アナホースポコアアロシニー作曲（独唱東京柴田環女、伴奏栗原欣子）［以外はおおよそ同じ］
〈明治43（1910）年10月27日『大阪朝日新聞』第10297号〉

神戸公演：
明治43（1910）年11月28，29日「岡山孤児院慈善演奏会」（湊川相生座）
（初日）△歌劇白衣婦人（陸軍軍楽隊）△開会の辞（発起者）△長唄越後獅子（陸軍軍楽隊）△琴曲楓の花（尾崎秀子）△独唱（ミセス、ウィルバー、ミス、デホレスト）△合奏松竹梅（菊月米秋、菊明弘、菊久茂登、菊本春）△独唱ビヂユー、ソング、グノー作曲（柴田環、ミス、デホレスト）△歌劇フォスト（陸軍軍楽隊）△活動写真、岡山孤児院（石井十次）△独唱（柴田環、ミス、デホレスト）△能狂言軟膏売（角田翁一派）△歌劇タンハイザー（陸軍軍楽隊）
（二十九日）△独唱オンブラー、レジェーラ、マイヤベヤ作曲（柴田環、ミス、デホレスト）［以下省略、上述参照］
〈明治43（1910）年11月26日『神戸新聞』第4544号〉

京都公演の記事にも「現下我が国声楽界の名花と呼ばるる柴田環女史」[10]、また神戸公演の記事にも「女流音楽家の明星柴田環女史」[11] とあり、集客力のあるスターと看做されていたことがよく分かる。実際、「柴田さんのソロがあるので」と言って聞きに出掛けた聴衆のあったことが、中野忠八（京都五條の薬問屋大和屋主人、京都「お伽クラブ」副会長）の妻、中野万亀子の日記から知られる[12]。「十月十九日……主人、今ばん青年館で音楽会。柴田さんのソロがあるので、十時すぎ帰宅。おもしろかったとの事」とあり、中野忠八が京都公演の二日目に出掛けて、帰宅後「おもしろかった」と妻に話したことが分かる。

一方、三浦環の伝記類では、これら一連の慈善演奏会に出演したことは触れられておらず、田辺久之『考証三浦環』（近代文芸社、1995）においても見落とされている。前年（1909年）の離婚と辞職、翌年（1911年）の帝国劇場開場に伴う声楽教師就任という出来事の狭間で、1910年秋の演奏活動は空白期間とされているのが現状である。

4）『石井十次日誌』に見る演奏会の舞台裏

これら一連の慈善演奏会がどのような経緯で行なわれたのか、どのような顛末があって、どのような成果を上げたのかを、『石井十次日誌（明治43年）』（石井記念友愛社、1981）から知ることができる。

明治43（1910）年の夏、石井十次はこれまでの自分の事業を振り返って次のように総括している。すなわち、7月22日（金）の日誌に「四十一年は茶臼原孤児院の整理に着手し、四十二年は大阪次行の整理に着手さしめ玉えり。而して四十三年より三箇所の事業を巡回監督してその生長発達を企図するの時代となれり」「岡山では祈祷が予の仕事也、大阪では托鉢するのが予の仕事也即ち訪問即伝道なり、茶臼原では鍬鎌主義の実行がその仕事也、大阪に於てはまず在大阪各教会の主にある兄弟姉妹を訪問し漸次未信の人々を訪問すべし、大阪がすんだら京都神戸に往くべし」とあり、これが秋の計画に繋がったと読める。

京都での慈善演奏会については、9月26日（月）「京都慈善会の発企者相談会に列す、来会者原田夫人、西浦信子、八木春子、大橋五男君、小沢君の五人なりき」、9月28日（水）「午後二時より日暮まで慈善会発起者の相談会を開きたり、集会者十九人。天父の御示導により左の如く定れり、（一）会場、青年会、（二）時日〔ママ〕、十月十三、十四、十五日、（三）演芸、柴田環女史、狂言、舞、琴、（四）委員長、武田猪平、副、大橋五男、委員、各部」とあり、ここで柴田環の出演が決まったことが知られる。この日程（10月13～15日）は、その後、10月18～20日に延期された。10月6日（木）に「どうも大阪市慈善会の準備の日時が足らぬ様な感じがする（幸にして延期したり、妙なるかな）」とある。10月15日（土）「午前中、慈善会のプログラム並に趣意書の原稿編成会を開く」とあり、いよいよ10月18日（火）「六時半より京都青年会館にて第一回開会」となった。ところが、翌19日（水）、柴田環が最終日を待たずに帰京すると言い出して大変なことになる。10月19日（水）「柴田環女史八時の列車にて帰途に着くと云うて困らせたり、天父は予の祈りを聞き召し給うて、終に片桐夫人をして留るべく決心せしめたまえり、炭谷師姉[13]も大阪よりわざわざこの問題について来援、一同安心の息をつけり」とある。また、この日の感謝祈祷として「柴田女史が明晩の夜行にて出立してくるるよう導き玉わんことを（午後八時天父はもーとてもと云う場合に救い給えり、片桐姉を使うて）」と書き付けており、柴田環を引き留めるのに非常な苦労をした様子が窺われる。10月20日（木）「本夜はようやく柴田嬢を引き留めたかと喜ぶと雨天となり、電気が消え、ピアノの鍵が失せ、重々の心配となれり」「炭谷姉は柴田嬢をステーションに送り、直ちに大阪に往かる」とあり、いろいろと思わぬハプニングが重なったものの、三日目の最終日まで柴田環の出演を得ることができたことが分かる。10月21日（金）の感謝祈祷にも「三日間の慈善会を祝し給い、特に柴田嬢を引き留め給い、かつ昨晩は種々なる故障を起し、柴田嬢には天来の声を出して歌わしめ」とあり、心労の種であった柴田環がともかくも出演してくれたことに対する安堵感が感じられる。

次の大阪公演では、京都での騒動に懲りたのか、石井十次自身が駅頭まで柴田環の出迎えに出向いたり、贈物をしたりといった心遣いを見せている。10月28日（金）「午前八時三分、柴田

環女史着阪せらる、梅田停車場に迎る」、10月29日(土)「柴田環女史に新約聖書詩編附を呈す」とある。

10月30日(日)、石井十次は京都と大阪の慈善会の成功を感謝すると共に、「理想の慈善演芸会」のプログラミングと時間配分を次のように書き記している。

「理想の慈善演芸会
一、岡山孤児院の幻燈活動、院長説明（一時間）
二、豊竹呂昇の壷坂寺第一夜、千代萩第二夜、寺小屋第三夜（一時間）
三、筑前琵琶（橘友子女史）三十分〔ないしは〕一時間
四、三曲合奏　三十分
五、西洋音楽　二十分」

この計画を胸に、石井十次は11月１日に上京し、11月２日「有楽座に呂昇一座の義太夫を聞」き、11月４日には「柴田環女史を訪」っている。さらに11月９～11日には「神戸市内の各教会の牧師を訪問し、慈善会の発起者候補者の選定を依頼せり」、11月11日(金)「早朝、村松吉太郎氏、松田治郎吉、女学院大森光子[14]、デホレスト師、吉田夫人、女子神学校バロス、コサード、柳原浪夫、河本糸子、谷井夫人を訪い、午後、青木、大野、渡辺、柳原、高橋、覚前諸氏を訪い」、11月13日(日)「第四師団の軍楽隊参観」と精力的に準備を進め、11月19日(土)「午後二時、神戸慈善会の発起者会に列す」ところまで漕ぎ着ける。

いよいよ神戸公演の前日、一番の気掛かりはやはり柴田環のことである。11月27日(日)「柴田環女史が今晩の夜行にて神戸の音楽会にぜひとも出席さるる様に御示導を祈る」「入江君より柴田嬢と共に東京を出発せりとの電報来る、これに安心せり」、11月28日(月)「いよいよ柴田嬢を導き給いしことまことにありがたく感謝いたします」「柴田嬢を三宮駅に迎ゆ、湊川相生座に往き部署を定む」「六時半開会七時半満員、雨天にも不拘盛会なりき」とある。ところが、前述のように柴田環が扁桃腺炎を悪くしてしまう。11月29日(火)「所感（柴田嬢本晩は唱へないとのことをきいて)神戸の音楽会はどうも気にかかったが果たして妙なことと相成申候、七時開会十一時閉会、本晩は御蔭にてスコットランド人や吉備舞の寄付ありて幸なりき」とあり、これを読む限り、柴田環が欠場し、それを「スコットランド人や吉備舞の寄付」が補ったように読める。その後、12月１日、２日には関係者を訪問し、12月２日(金)「三時より垂水田村氏宅の慰労会に列す」、また12月10日(土) には「午後一時、神戸女学院に往き慈善会報告感謝会を開く」とある。

なお、これら一連の慈善演奏会によって、京都では35万円、大阪では180万円、神戸で150万円の純益が得られたことが、12月16日付の次の書簡（在米国小野田鉄弥宛)[15] から知られる。

京阪神の音楽会、十月十八、十九、二十日の三日間京都にて、十月二十八、九は大阪にて、十一月二十八、九は神戸にて東京より柴田環女史を招き大音楽会を開き、京都にて純収三五〇、〇〇〇、大阪にて一八〇〇、〇〇〇、神戸にて一五〇〇、〇〇〇を獲申候、これは内

地における慈善会として近来珍しく盛況にて有之候、これ近来慈善会復活の証と存候、人気の直りたる証と存候、御喜び被下度

これは当時としては大変な金額であったと思われる[16]。柴田環の来演については苦労が多かったとはいえ、やはりその社会的な反響には大きなものがあったことが、この金額からも窺われる。

以上、明治43年の『石井十次日誌』から、一連の慈善演奏会の顛末と舞台裏、特に主演の柴田環を巡る騒動の概略が浮かび上がってきた。

5）三浦環の伴奏者たち

さて、これら一連の慈善演奏会において三浦環の伴奏を務めた人物を見てみると、京都では泉千代子、大阪では栗原欣子、神戸ではデフォレストと、それぞれの町のピアノ奏者と組んでいることが分かる。この内、泉千代子は平安女学院の卒業生で、明治42（1909）年11月[17]と明治43（1910）年６月には京都[18]で、また同年10月26日には大阪音楽協会の演奏会に出演して話題となっている[19]。後者の出演は柴田環との共演のわずか２日前のことである。

次に、栗原欣子については、明治40（1907）年に「八年間東京音楽学校に在りて音楽を研鑽した栗原欣子女史[20]」、明治41（1908）年に「当地では唯一の女流ピアニスト[21]」、明治42（1909）年に「ピアノの名手栗原欣子嬢[22]」、「大阪ピアノ界の第一流と称せられている栗原欣子嬢[23]」等と報道されており、当時の大阪で一番の名手と看做されていたことが分かる[24]。東京音楽学校の同窓生として、栗原欣子は以前にも柴田環（当時は藤井環）との共演の経験があった。明治41（1908）年３月27日と28日の二日間、大阪婦人矯風会主催により中之島公会堂で「メンデルゾン作曲のジエルサレム、モツアルト作曲フィガロ、ホホツアイト、東京音楽学校教師藤井環夫人、伴奏栗原欣子嬢」（『音楽界』第１巻第５号、明治41（1908）年５月号）で共演している。

こうして見ると、それぞれの町で活躍している話題の若手ピアノ奏者が伴奏者に選ばれたように見える。とするなら、デフォレストの場合はどうだったのだろうか？この疑問に答えるために、当時の新聞に掲載された音楽記事を丹念に拾っていったところ、デフォレストの学外における演奏として次の４つの音楽会が報道されているのを見出した（表２参照）[25]。

表２から、明治40（1907）年11月25日、明治41（1908）年10月24日、明治43（1910）年２月10日、同年４月15日の４つの演奏会において、デフォレストは「マンドリン、ギター合奏」（２回）、「ピアノ独奏」（３回）、「ピアノ連弾」（１回）、「音楽［内実不明］」（１回）の計７ステージを踏んでいることが分かる。20代の終り頃、デフォレスト（1879年生）は神戸教会や神港倶楽部で行なわれた慈善演奏会にしばしば出演して、ギターやピアノの演奏を披露していたのである。

当時の神戸には、すでに東京音楽学校の卒業生たちが市内の各学校の音楽教師として赴任しており、神戸音楽会も組織されて演奏活動も行なわれていたので、その中から伴奏者を選ぶということもあり得ただろう[26]。あるいは、大阪公演と神戸公演の出演者を見比べてみると（上

表2）デフォレストの学外における演奏一覧（下線筆者）

1）明治40（1907）年11月25日、日曜学校新築慈善音楽会（下山手6丁目神戸教会）午後6時半

「日曜学校新築慈善音楽会」「25日午後6時半より市内下山手6丁目神戸教会に於て開催す、オルガン（独奏、エ、エル、ハウ）、マンドリン、ギター（合奏、デフォレスト外1名）、ピヤノ（独奏、ミス、デフォレスト）　〈明治40（1907）年11月21日『神戸新聞』第3474号〉

2）明治41（1908）年10月24日、神戸訓育院慈善演奏会（神港倶楽部）午後6時

「慈善演奏会」「24日夕より神戸訓育院慈善演奏会、唱歌（女学院生徒）、ピアノ連弾（スタンフォド夫人、デフォレスト嬢）」　〈明治41（1908）年10月23日『神戸又新日報』第8005号〉

「訓育院慈善演奏会」「24日午後六時より神港倶楽部、唱歌(女学院生徒)、マンドリン、ギター合奏（クリステンセン、ゴルドン、デフォレスト、北川よし子)、ピアノ連弾（スタンフォド夫人、デフォレスト嬢)」　〈明治41（1908）年10月23日『神戸新聞』第3802号〉

3）明治43（1910）年2月10日、神戸高等商業学校第4回語学大会（神港倶楽部）午後6時

音楽（ピアノ独奏）（ドフォレスト嬢)、音楽（ドフォレスト嬢、コツクロフオ嬢）

〈明治43（1910）年2月10日『神戸又新日報』第8465号〉

「7時頃既に満員札を掲げて入場を謝絶したる程の盛会を告げたるが」「聴衆の大部分は男子なりしも婦人及び西洋人も亦少なからず閉会せしは10時半頃なりき」

〈明治43（1910）年2月11日『神戸又新日報』第8466号〉

4）明治43（1910）年4月15日、神戸基督教会婦人会主催慈善演芸会（下山手通6丁目神戸教会）午後6時

「慈善演芸会、神戸基督教会婦人会にては16日午後6時より下山手通6丁目神戸教会堂に於て慈善演芸会を開催す、ピアノ独奏(小倉末子嬢)、オルガン連奏(森本縫子嬢、喜多川純子嬢)、ピアノ独奏（中島検校、デフォレスト嬢)」

〈明治43（1910）年4月15日『神戸新聞』第4323号〉

記の表1参照)、軍楽隊や能狂言の角田翁一派のように大阪と神戸で共通の出演者も多数見られるので、大阪から栗原欣子が来演するということも十分可能だったに違いない。それにも拘らず柴田環の伴奏者としてデフォレストに依頼が行ったという点が興味深い。これは、柴田環に見合う伴奏者として栗原欣子よりデフォレストが選ばれたということを意味している。デフォレストが伴奏してもしなくても、神戸女学院が石井十次に全面的な支援を与えたであろうことは歴史的経緯から明らかであるので（これについては次節で述べる)、神戸女学院の支持を取り付けるためにデフォレストが抜擢されたという見方は説得力を持たない。

当時、デフォレストはヴァーグナーの楽劇のピアノ編曲版を所持し、それを実際に演奏していた様子が楽譜への書き込みから知られる[27]。これはオペラとそのピアノ伴奏譜に馴染みがあったことを意味する。デフォレストの音楽的な素養がどのようなものであったのか、今後さらに考えていく必要があるだろう。

6）石井十次と神戸女学院

次に石井十次と神戸女学院との関係を考えてみたい。先に触れたように、石井十次は慈善会の準備の段階で、11月11日（金）「女学院大森光子、デホレスト師」を訪問し、終了後の12月10日（土）「午後一時、神戸女学院に往き慈善会報告感謝会を開く」と礼を尽くしているが、両者の関係にはもっと奥深いものがある。

神戸女学院では、すでに明治38（1905）年から岡山孤児院の活動写真の上演を学内で行なっている。明治38（1905）年11月16日「午後７時講堂にて岡山孤児院活動写真あり、院内有志者より金15円を集め同院へ寄附す[28]」、また明治39（1906）年10月20日にも「夜、岡山孤児院活動写真講堂に於て演ぜらる」との記録が残っている[29]。さらに明治40（1907）年４月19日「ソール院長は目下逗留中の従姉トイナー嬢を伴い岡山孤児院二十年記念会に出席せらる」[30] とあり、院長が率先して岡山孤児院の支援に関わっていたことが窺われる。

そもそも石井十次に洗礼を授けた日本組合岡山基督教会初代牧師の金森通倫牧師は、神戸女学院の最初の卒業生（明治15（1882）年卒業）の一人、金森こひさ（旧姓西山）の夫であった[31]。岡山県甲種医学校で医師の道を目指していた石井十次が孤児院事業に転向した当初から、金森こひさを通じて神戸女学院関係者の間では岡山孤児院支援の機運が生じていたのではないかと推測される。

こうした流れの中で、デフォレストは明治38（1905）年に神戸女学院に赴任したのであるが、実はデフォレストにとっては、彼女の父で同じく宣教師であったジョン・デフォレスト（1844–1911）が岡山孤児院の熱心な支援者であったというさらに個人的な繋がりがあった。明治40年４月20日に発行された坂本義夫『岡山孤児院』は、第24章「評議員其他」において「デホレスト氏」の項を設け、次のように論じている。

> デホレスト氏は直情径行の士にして、その行動常に活気あり、在日宣教師中第一位と移せられ、京都同志社教師デビス氏と共に名声赫々たり。殊に慈善心に富み、特殊の行為少なからず、往年東北稔らずして、野に餓狐あるや、氏は早くも仔細を本国に報告する所あり、為に多額の義捐金ありたることは、我が国民の感謝する所なり。又孤児院が東北凶作地の孤児貧児を救済せし際も、率先して斡旋し、本国の同胞に訴える所ありたれば、前後幾回多額の金額は氏の手を経て孤児院に寄附されたり。氏は今を去る三十年前宣教師として来たり、爾来仙台にあり、岡山のペテー氏と共に、組合教会宣教師の古参たり。

したがって、デフォレストにとって岡山孤児院は、赴任先の神戸女学院が継続的に支援し、また父ジョン・デフォレストが熱意をもって支え続けていた社会福祉機関であったということができる。

7）デフォレストにとっての音楽活動

以上から、岡山孤児院と神戸女学院、さらにデフォレスト家との強い繋がりが明らかになっ

た。その支援のための慈善演奏会であれば、デフォレストは出演を快諾したのではないだろうか。

表2が示すように、デフォレストの出演した演奏会はいずれも、「日曜学校新築慈善音楽会」「神戸訓育院慈善演奏会」「神戸高等商業学校第4回語学大会」「神戸基督教会婦人会主催慈善演芸会」と、教会関係ないしは教育機関のための会という性格を持っていた。会場は神戸教会か、そのすぐ近くの上流人士の集う神港倶楽部かのいずれかであった。

この意味で、湊川新開地の相生座における岡山孤児院慈善演奏会は、趣旨の点ではデフォレストの従来の活動方針によく適うものであったが、一方、実施場所については全く異例のものであった。おそらく、軍楽隊や能狂言といった多様な演目を演じるには教会や倶楽部では不都合が多く、劇場の舞台機構が必要とされたのであろうし、集客の点でも大衆的な大劇場が望ましいとされたのであろう（相生座はぎっしり人が詰めかけると2000人ほど収容できたと伝えられる）。話題の柴田環を呼んでの大掛かりな演奏会であり、その規模の違いが従来にない演奏の場を余儀なくしたと考えられる。さらに、岡山孤児院は以前、音楽活動写真を神戸楠公（湊川神社）前の大黒座に掛けたことがあり、そうした繋がりもあったことだろう。

かくして、明治43（1910）年11月28日、宣教師デフォレストが新開地相生座の舞台で柴田環の伴奏をするという「不思議な舞台」が成立した。この舞台を支えたのは、日本初の孤児院を支援しようとする意志であり、そのために自分の持てる音楽の力を活かそうとする社会的な使命感であったと考えられる。

1923年に出版した著書『*The Woman and the Leaven in Japan*（パン種としての日本女性）』の中で、デフォレストは三浦環について次のように記している。「声楽では三浦環さんが『蝶々夫人』などのオペラで世界的な名声を得てきました。彼女の美声は日本で評判でしたが、彼女は1914年に日本を去り、8年間海外で活躍しました。ワシントンで間もなく前線に向けて出発するという兵士のために、毎晩歌っていた彼女は、その数週間の期間を「私の生涯でいちばん幸せな日々」と言っていました[32]」と。

ここで印象深いのは、デフォレストが三浦環について書き残したエピソードが、王侯貴族の前で歌った話しや有名歌手と共演した話しではなく、出征兵士のために歌った話しであるという点である。音楽の力を何のために使うのかという点で、ここにはデフォレストの音楽観が端的に現れている。それは広く社会のために奉仕するべきものとして示されているのである。

8）まとめ

以上から、1910年11月28日、神戸湊川新開地の相生座で、デフォレストが柴田環を伴奏して演奏したのはロッシーニ作曲のアリア〈ウナ・ヴォーチェ・ポコ・ファ（今の歌声は）〉であったこと、岡山孤児院と神戸女学院の間には深い関わりがあり、またデフォレストの父も岡山孤児院の熱心な支援者であったこと、当時のデフォレストは教会および教育関係の慈善演奏会にしばしば出演していたこと、デフォレストにとって音楽活動はあくまで社会に奉仕するものとしてあったことが明らかになった。

先に触れたように、石井十次の「理想の慈善演芸会」は「義太夫節1時間、筑前琵琶30分な

いし１時間、三曲合奏30分、西洋音楽20分」という構成であった。実際には、豊竹呂昇の来演も橘友子の来演も実現せず、長唄や能狂言、琴や三曲合奏などの日本の伝統芸能と、軍楽隊や内外人による西洋音楽とで構成されたが、いずれにしても「ごたまぜのプログラム」であった。これは一つには、できるだけ多くの聴衆を集めるための方策であったと思われるが、もう一方で、当時の日本における西洋音楽の受容状況を映し出していると考えられる。なぜなら、慈善演奏会とは、留学経験や高度の教育を通じて直接に西洋音楽に接し得たごく一部の知的エリートだけを対象とするのではなく、ある程度生活に余裕があるという条件はついても、広く多様な人々を対象として行なわれるものであり、したがってこの「理想」とは、石井の目から見た一般の人々の音楽需要の具現と言ってよいからである。その意味で、ここには当時の関西主要都市における人々の趣味のあり方と、日本社会における西洋音楽の立場とがくっきりと反映されていると考えることができる。

次に、学内演奏会および慈善演奏会以外には出演することのなかったデフォレストと、この時はまだクリスチャンではなく、京都事件からも窺われるように必ずしも慈善演奏会に熱心でなかったように見える柴田環とを出会わせたのは、石井十次と彼の活動に連なる人々であった。石井十次がいろいろと苦労してでも柴田環を担ぎ出したのは、柴田環の人気ゆえであると共に、それなりの成算があってのことだったろう。すなわち、石井の孤児院活動が柴田環と多くの聴衆とを動かすという見込みである。孤児院活動とは、災害救援などと違って、はるかに長期的で教育的な社会活動である。そのような活動と西洋音楽との結びつきは、現代日本の純粋に自律的な活動としてのクラシック音楽のあり方からは、異質に見えるのではないだろうか。明治末年の日本における西洋音楽は、現代よりももっと有機的に人々の活動の中に織り込まれていたのかも知れない。このようにデフォレストと柴田環の驚くべき共演が実現した背景と文脈を考えてみることは、明治末期の日本における音楽世界について多くのことを語ってくれる。

謝辞

本論は神戸女学院大学研究所2009年度研究助成（研究課題名「明治期の音楽教育とピアニスト小倉末子」）によって支えられている。ここに記して謝意を表する。

注

1　竹中正夫『C. B. デフォレストの生涯』（創元社、2003）でも、音楽科の主任として一年間ピアノと音楽理論を教えたことが述べられているだけで、演奏活動については言及がない。
2　柴田環は、藤井善一と結婚していた1905年から1909年までは藤井環を、三浦政太郎と結婚した1913年以降は三浦環を名乗った。
3　のじぎく文庫編『神戸新開地物語』（のじぎく文庫、1973年）、村松帰之『わが新開地』（文化書院、1922年）参照。
4　「変更」とあるのは、前日（11月25日）の紙面に短い予告記事が載ったからであるが、そこには簡略な情報しか掲載されておらず、デフォレストや石井十次の名はない。
5　この曲もコロラトゥーラの華やかな曲で、演奏時間は７分ほどである。

6　これが不明の３曲目だった可能性は十分に考えられる。
7　『石井十次日誌（明治40年）』（石井記念友愛社、1977年）238ページ。
8　西原稔『新編、音楽家の社会史』（音楽之友社、2009）、第２部第４章参照。
9　田辺久之『考証　三浦環』（近代文芸社、1995）による。
10　明治43（1910）年10月14日『大阪朝日新聞』第10284号、京都附録。
11　明治43（1910）年11月29日『神戸又新日報』第8750号。
12　塩津洋子「明治43年京都の洋楽事情―ある商家の若妻の日記を基に―」大阪音楽大学音楽博物館年報『音楽研究』第20巻、1-17ページ。
13　炭谷小梅（1850-1920）は石井十次の孤児院事業に協力し、「岡山孤児院の母」と呼ばれた人物。明治11年には短期間、「神戸のガールズスクール」（現在の神戸女学院）で学んだこともある。明治14年に受洗し、神戸女子神学校で訓練を受けた後、婦人伝導師として全国を奔走した。
14　大森光子は、1907年から1914年まで神戸女学院の舎監を務めた人物。
15　『石井十次日誌（明治43年）』（石井記念友愛社、1981）、255ページ。
16　週刊朝日編『値段史年表、明治大正昭和』（朝日新聞社、1988）によれば、明治43（1910）年の「銀行の初任給」は40円、明治44年（1911）年の「公務員（高等文官）の初任給」は55円であった。
17　「平安女学院の卒業生泉千代子嬢のピアノ独奏」『日出新聞』明治42年11月15日。『音楽世界』第３巻第11号によれば、ウェーバー作曲の〈ロンド・ブリランテ〉を弾いて「まことに華麗なる曲なり、面白く嬉しく聞きしが、新来の名手、幸多かれ、大喝采」との演奏評を得ている。
18　「京都音楽会」『日出新聞』明治43（1910）年６月14日。
19　『音楽界』第３巻12号、明治43（1910）年12月。
20　『音楽月刊』第27号、明治40（1907）年４月号。
21　『大阪毎日新聞』明治41（1908）年７月23日。
22　『日出新聞』明治42（1909）年１月８日。
23　『大阪毎日新聞』明治42（1909）年６月28日。
24　明治39（1906）年12月２日の「大阪音楽協会演奏会第一回演奏会」（於：中之島公会堂）でベートーヴェンのピアノ・ソナタを弾く等の活躍をしている。
25　これらの調査は大阪音楽大学音楽博物館の明治期資料収集によっている。
26　青木兒、永井幸次、米野鹿之助、田中銀之助らがいた。
27　津上智実「シャーロット・デフォレストの楽譜：『ヴァーグナー楽劇選集』（ピアノ独奏用編曲版）」神戸女学院『学院史料』第24号（2010年７月発行予定）を参照。
28　神戸女学院『めぐみ』第39号（1906年３月発行）１ページ。
29　神戸女学院『めぐみ』第41号（1906年12月発行）２ページ。
30　神戸女学院『めぐみ』第43号（1907年７月発行）５ページ。
31　『神戸女学院百年史（各論）』（1981年）、205ページ。
32　三浦環は大正11（1922）年４月に帰国し、５月25、26日には大阪の中之島公会堂でも独唱会を行なっているので、デフォレストはそうした際に会って話しをする機会があったものと想像される。引用文はC.B.デフォレスト『パン種としての日本女性』（別府恵子、頼広節子訳、春秋社、1984年）、145-146ページによる。

（原稿受理　2010年３月18日）